

巻 頭 言

今再びの前進を

会長 関田 一彦

(創価大学副学長・教育学部長)

去る11月15日、創立者池田大作先生がご逝去された。謹んで哀悼の意を表すとともに、後継の決意を新たにしたい。

教育学部は本学の創立から6年目、1976年に、経営学部、通信教育部とともに開設された。草創の3学部が続く学部として、文学部の一学科としてではなく、学部として誕生した。当初から教員養成を主たる目的とする児童教育学科と、教育学を学び考究する教育学科の二学科体制でスタートしている。創価教育・人間教育を体現する教員養成を使命とする学科と、人間教育についてその理念・内容・方法を研究する学科、まさに理論と実践の往還を学部教育で試みるような構成であった。

以来四十幾星霜、今、日本の教員養成は大きな転機を迎えている。少子化が進む中、教員のなり手が減少し、小学校では学級担任制の維持さえ難しくなってきている。土日の業務、無給の残業、保護者からのクレーム、特別な教育的配慮を必要とする児童生徒の増加など、現場の課題は山積している。このようにブラックな職場として教職志望の学生が減少する中でも、本学は通教生や卒業生を含め毎年200名を超える教員採用試験合格者を出してきた。

翻って、文科省は教職志望者の減少に対し、教採の3年次受験、早い段階での学校体験の促進（教育実習の分割）、二種免許制を活用した複免の奨励、といった教師の促成栽培施策を矢継ぎ早に打ち出している。教育学部もこうした変化に対応すべく、今年から始まった新しいカリキュラムでは1単位科目（8週で完結）の拡充、「学校インターンシップ」の「学校体験活動」への読み替えなどを急いでいる。

しかし、人間は促成栽培できない。無理な早期教育や過度の英才教育は必ずしも子どもの幸福を約束しない。同様に、人間を育てる「教師」の育成も拙速であってはならない。教職という仕事では、知識・技能の伝達において、あるいは校内分掌や管理業務において効率化できるところはあっても、子どもたちの人間的成長に寄り添い、時には熱く叱咤し、時には静かに見守る労作業において、時を待ち時を創る忍耐と勇氣は即席で身につくものではない。教職課程の4年間で土台として、教員として教壇に立つ日々の経験が年輪のように刻まれ、やがて太い幹となり、「教師」という名の成木となる。

本会には学部や大学院の教員だけでなく、多くの学生と卒業生が参加している。学部や教職大学院での学びを土台とした、平和を願う世界市民の育成に取り組む本物の「教師」たちの揺籃である本会の使命は大きい。創立者は21世紀を教育の世紀と定め、2つの教育提言をはじめ、数多くの指導・講演録を残してくださった。「教育の勝利が人間の勝利」ならば、そのカギを

握るのは本会会員の研鑽の連帯であり、その成果の国内外への発信であると自覚したい。『創大教育研究』は単なる紀要ではない。創立者が語り示された人間教育の理念を宣揚し、実践の中に具体化する試みを世に問う媒体である。創立者のおられない新年度を迎えるにあたり、改めて会員諸氏とともに発会の初志を確認し、学部創設50周年に向けた歩みを進めたい。